

第4回 札幌市国際戦略プラン懇談会 議事録

日時：平成24年12月7日（金）12：30～14：30

場所：札幌国際プラザ会議室（中央区北1条西3丁目MNビル3階）

出席委員：石井座長、加藤（丈）委員、加藤（由）委員、木村委員、熊谷委員、佐藤委員、サムット委員、張委員

1. 開会

2. 議事

<事務局>

議事進行についてよろしくお願いします。

<石井座長>

では早速、議事に入る。議事の一つめ、「札幌市国際戦略プラン骨子案」について、事務局よりご説明いただく。

（資料1-1、参考資料2について、事務局から説明）

<石井座長>

事務局でご説明いただいた内容について、議論に入りたい。資料1について、これまでの議論に基づきさらに検討し、前回とはかなり異なる内容になっているとのこと。

まず、区切って話をしたいと思うが、「理念と構成」のあたりについて、ご意見を伺いながら議論していきたいと思うが、いかがか。

<佐藤委員>

今回の資料全体はよくまとめていただいた。「理念と構成」について、前回は理念はまだ明確に示されていなかったが、これまで我々が議論してきた内容は「まちづくり戦略ビジョン」の理念と一致しているな、と思ったので、これを「国際戦略プラン」に持ってきたというのは非常に良い。その具体化として、基本方針Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとしたのはうまく繋がったのではないか。基本方針ⅠとⅡは、たたき台として戴いていたものより、分かりやすくなった。前の資料では、基本方針Ⅰは「情報発信」というだけで内容がぼんやりしていると思っていたが、今回は「情報発信」と「海外の成長を取り込む交流の推進」と書いてあるので、分かりやすくなった。ただ、基本方針Ⅲは、前回は「持続可能な社会の実現に向けた環境整備」として、基盤整備をやっていこう、ということだったと思うが、今回その部分は「互恵的な国際交流」ということになっているので、基盤整備という意味では弱くなったという印象がある。

<熊谷委員>

私は逆にⅢについて、一步前進したと考えていた。10年の計画なので、ここまで踏み込んだほう

が前進ではないかと捉えている。前回の時と今回で一番違うのは、国際政治情勢ではないかと思うが、脱中国、韓国と、台湾などについても動きがある。「どんな情勢にも対処できる」というようなことをどこかに入れた方が良いのではないか。ただ「取り込む」「期待できる」ということでは済まないような現状になってきていて、打撃を受けている。今後 10 年間でどんなことがあるか分からないが、どこかにそのような視点を入れるべきではないかと考える。

また、全体としてよくまとまっているとは思いますが、目玉がないのではないかな、とも思う。それが何かという思い付かないが。

<石井座長>

ありがとうございます。今出た意見に関わることで、「どの情勢にも対処できる」ということが言われたが、国レベルの国際交流と地方レベルの交流は、もともと異なると思う。国が領土問題で揉めているということと、地方が中国と韓国との交流をどうするのかということは、ハッキリ別々の立場を基本に置く方が良いのではないか。むしろ、市民レベルの交流は淡々と行っていく、ということが基本にあるということ、どこかでハッキリ書けたらいいのではないかという印象を持った。

事前に見た時には「まちづくり戦略ビジョン」の言葉としての二つと、「国際戦略プラン」というのは非常にマッチすると私自身も思っていたが、具体的な「まちづくり戦略ビジョン 概要版」（参考資料 2）を見ていくと、「目指す札幌市の将来」（参考資料 2、P4）の中で「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」のところで、単純に「札幌型ライフスタイルの確立」というだけではなく、「世界に誇る環境首都の実現」ということで、かなり踏み込んで、脱原発依存ということが書いてある。また、下の方でも「世界の中での都市の共生」ということが書いてあって、ここまでビジョンで書いてあるのであれば、極端に言えば、それに則した「国際戦略プラン」というのはちょっと違うものになるのではないかと思った。「協力していく」という先進国的な立場で、もっと国際貢献していく、ということ（国際戦略プランでは）言っているが、（まちづくり戦略ビジョンでは）全く逆。努力するとは書いてあるが、非常に厳しい状況の中で、ある種、国際的にちゃんとできる形を作る、というポジション。これをベースにした場合、国際戦略プランは焦点がかなり違っていると読めた。主体的に自分たちが環境調和ということで世界に誇れることを目指す、ということはどう受けるか、が全くない。「世界」と使っていることの意味合いの問題ももちろんあるが、単に我々が「協力していく」ということを言っている一方、もっと自分たちが「取り込んで」やらなくてはいけないということが（ビジョンの方では）あるように思う。概要版は今日初めて見たが、ここまで書いてあるんだ、というのが率直なところ。この発展形としての国際戦略プランだとすると、少しアンバランスなのではないかと感じたが、いかがか。上位計画の内容を基にするとすれば、少しギャップがあるのではないか、ということ。

<熊谷委員>

「まちづくり戦略ビジョン」は、札幌市として確定ということか。

<事務局>

現在パブリックコメント中であり、変更は今後もあるが、審議会からの答申を受けた内容である。

<加藤（丈） 委員>

「世界に誇る環境首都の実現」ということは、世界の環境政策を札幌がリードしていく、という決意。

<石井座長>

それであれば、国際戦略プランがその内容を受けていなければ、整合性が取れない。具体的な話を盛り込んでいかなければ、とてもじゃないが実現できない。元々、現実の政策とのギャップがあるのではないかと感じていたものでもあるが、計画上でもギャップが残っていたら、計画としてどうなのか、ということ。

<佐藤委員>

我々が議論している「国際戦略プラン」で、脱原発や低炭素社会という政治的な問題まで踏み込むのは難しいのではないかと。

<石井座長>

しかしこれは、まちづくりの方針なので、政治的な主張ではない位置づけになっている。

<熊谷委員>

1つの市でできることではないのでは。

<佐藤委員>

さらにその中の国際戦略プランに入れ込んでしまうと、議論がまとまっていけないのではないかとと思う。

<石井座長>

逆に言うと、リンクを緩やかにしないと論理としては変になるので、言葉だけと言っても、内容としてはこれら（都市像を説明する3つの柱）を受けていることになる。この3つの柱を受けて、（現時点の）国際戦略プランの内容になる、というのが納得いかない、ということ。これを受けた内容を入れないとしたら、ビジョンが上位計画になってこない。

<熊谷委員>

6つの詳細（柱）ではなく、大きな都市像自体は国際戦略に繋げやすいが。

<石井座長>

言葉は繋げやすいが、意味はこの6つになる。このキャッチ（2つの都市像の文言）を使うとすれば、意味が6つの柱の内容になる。

<事務局>

これらの柱についても、「国際」という切り口から関わりが出てくることになる。

<石井座長>

少なくとも、ここに書いてあることを前提として、これの実現を睨んでつくった、という話になる。上位計画、ということで、このように（強い繋がりを持って）策定するのであれば、全く整合的ではない。

<佐藤委員>

それでは、『北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち』というのは同感。その中の3つの柱の主として一つ目と二つ目を対象にする」ということはできないか。海外との交流、という切り口から1と2のみを中心にする、ということ。

<熊谷委員>

しかし、三つ目の柱に「世界に誇れる」というフレーズがある。

<佐藤委員>

または、構成の図のところの「まちづくり戦略ビジョン」という記述を取ってしまう、など。

<事務局>

「まちづくり戦略ビジョン」の部門別計画という位置づけであるので、外すことは考えていない。

<石井座長>

脱原発についてこだわっているわけではないが、（プラン骨子案）P20の一番最後の段落のところ、「世界に誇る環境首都の実現」にリンクする部分なのだと思うが、率直に言えば、ちょっとこれでは弱いということ。先ほど言ったのは、リンクを止めるか、リンクするならば、少し踏み込みを入れるというどちらかしかないということなので、止めろ、ということだけを言ったのではない。もう少し工夫して、情報発信や交流をする、ということを書いてもよいのではないか。それ自体に反対したわけではない。むしろ、リンケージがちゃんとあった方が良いという話。

<加藤（丈）委員>

こういう表現をしているということは、ひとつのまちづくりの目玉として「環境首都の実現をする」ということを宣言をしているのであるから、国際戦略プランの基本方針Ⅲに出てくるのはわかるが、ⅠもⅡも含めて、（資料1-1の）左下の「札幌を取り巻く社会経済情勢と課題」の課題の中でも、「環境首都としてアピールしたい」ということを前面に出すために、随所に「環境」がキーワードとして出ていれば、全体としてこことリンクしているということが伝わる。しかし、環境首都については、ちょっとリンクが弱いと思う。

<石井座長>

基本方針Ⅲが違和感があるということ。「国際協力」で終わってしまっている。むしろ、リードするようになるために、情報交流や、場合によっては支援してもらう、「協力してもらう」べきところがなければ、本当に環境先進都市にはなれない。こちらがプレゼンス高く持っているのではなく、あ

る種いゝろんなところの知恵や協力を得て、自分たちがやっていく、というスタンスと、協力ということの両方を入れないとバランスしない。

<事務局>

「互惠的」という言葉では弱いということか。「互惠的」という言葉でお互い win-win ということを示したつもりだった。

<佐藤委員>

「基盤整備」とか「環境整備」というニュアンスを入れたら良いのではないか。

<石井座長>

文章の方では、「互惠的な国際協力を行い」となっていて、することしか書いていない。されるよりはする方の意味合いがずっと強いので、得る部分とする部分と両方ハッキリ書いた方がよいと思う。そうでないと言っている目標は達成しない。環境でリードしていくということに反対なのではない。実現はハードルが高いので、いろいろな努力をしなければ成功しないというニュアンスを出してもらえたら良い。引き続き検討していただきたい。

<木村委員>

「まちづくり戦略ビジョン」と併せて考えた場合だと、あまり具体的に拘束されないような表現を考えた方がよいと思う。例えば、脱原発の話が出たが、原発そのもののあり方が地震前後に変わっており、私が子どものころは原発は夢の技術と教えられてきた。今、突然がらっと変わって原発そのものが悪いものということになっている。今後 5 年、10 年というスパンで考えたとき、その時代に応じてどちらでも取れるようにしておかないと大変なのではないか。政治的、という話もあったが、可能な限りどちらでも取れるような曖昧な表現にしておいた方が、後々良いかもしれない。

<サムット委員>

日本語の話だと、外国人にはちょっと分かりにくい。(理念と構成の内容については) ここからどのような施策でも考えられるということであるので、私はこの部分にはあまりこだわらない。どんなものを読んでも、大体同じという印象がある。この下の実行計画に繋げるときに、解釈すればよい。

先ほど話に出ていたが、国レベルのいろいろな問題があったとしても、札幌市は世界の市民とできるだけ協力して、平和的に市民交流する、ということから「世界が憧れるまち」となるよう入れられるかどうか。そういうイメージを持たせることが必要。

<石井座長>

今の話にあった後半の部分はイメージとして非常に大事だと思う。広島などは平和を掲げているので、ある種紛争と関係なくどこでも付き合っていくというイメージを非常に明確にしている。そういう部分は発信できる範囲でうまく盛り込めたらいいのではないか。

また、先ほど私は整合性ということと言ったが、このとおり踏み込みなさい、ということではないので、一定の整合的な記述があってそれで事足りるのであれば、それでももちろん良いと思う。

<加藤（由）委員>

戦略プランなので、「戦略」というのは一歩進んでいないとまらないもの。ただ単にビジョンとして示すだけであれば夢の世界を描くのも良いが、方針などに揺らぎがないものにしないと、アクションプランとの整合性が取れなくなる。確かに、基本方針Ⅲの「互恵的な」という表現は、**Sustainable Development**（持続可能な開発）という考えそのものが、互恵的でないとやっていけない、両者ともが **win-win** にならない。なので、当然ながら課せられたものと、私たちが協力していく、という部分がセットになっていないとまらない、ということを明確にするべき。

<石井座長>

ご指摘のとおり、「持続可能な社会」がそういう性質のものであるというのはそのとおりだと思う。言葉にこだわるわけではないが、内容がきちっと盛り込まれていれば、それで良いのだろうと思う。

<張委員>

基本方針Ⅲの「持続可能な社会の実現に向けた」というこれは、1つの目的であると思うが、（まちづくり戦略ビジョンの）目指す都市像の中には、この文言がない。ここでぼんとこれだけ出てくるのはどうなのかな、という気がした。また、「持続可能な社会の実現」というテーマになったときに、平和、人権、環境というこの問題だけでクリアできるのか。それ以外にもまだまだあるような気がする。第3章のまちづくり戦略ビジョンとリンクさせるのであれば、「持続可能な社会の実現」という文言をもっと分かりやすくしてもよいと思う。これは、国際戦略だけの文言なのか、まちづくり戦略ビジョンの中でもそのような文言があって、そのために「互恵的な国際協力」を進めるということになっているのか、そのあたりが分かりづらくなっているように思う。

<石井座長>

概要版だからということはあるかもしれないが、まちづくり戦略ビジョンの方でも、基本目標レベルでは、「国際化」に関するところは経済のところで一項目入っているだけ。率直にいうと、こちらもアンバランス。少しポジションとしてはいかがなものか、というのがある。本当はもっと随所に盛り込むべき項目があるはずだし、整合的ではない、というのはこちら（国際戦略プラン）だけの話ではないという印象がある。将来像からブレイクダウンして、基本目標の中で一か所しか書いていないというのは、寂しいというか、内容の不突合があると思う。（まちづくり戦略ビジョンに関しては）この場で議論することではないが、多少そのような不整合があってもやむを得ないということか。

<熊谷委員>

現段階で、パブリックコメントをしているということは、この会議として提言することもできるのではないかな。

<石井座長>

せめて環境のところでもう少し、国際協力というだけではなくて、先進的な情報共有や発信をこちら（まちづくり戦略ビジョン）の方につながる内容を書いていただくことが必要か。まちづくり戦略

ビジョンの方について議論をすると終わらなくなるので、印象だけ申し上げたが、その部分は今後の課題としてもう少し盛り込んでいただくことを検討いただきたい。

「理念と構成」、実質的に「基本方針」のところまで話が進んだが、他に意見がある方はどうぞ。

<張委員>

「理念と構成」の中に、まちづくり戦略ビジョンの都市像が来たというのは、私は良いと思う。そのために国際戦略はどうするか、というのは非常に良い。

<石井座長>

それが本来の姿でもある。何点か意見が出たので、その後の「戦略推進の考え方」と「推進体制」「進捗管理」について、ご意見は。

<サムット委員>

「戦略推進の考え方」で、海外ネットワークの活用、充実していく、ということに関係するか分からないが、札幌にいる海外の人材、外国人を活用していく、ということを大きくビジョンとして取り上げていただきたい。「世界が憧れるまち」ということは、そういう人たちが日本から離れない、来たら帰りたくないというくらいの憧れという意味。そういう人たちのネットワークを使いながら、人材に残ってもらうためにどうしていくか、そのために札幌はどう海外にネットワークを作っていくかということ。この2番目の項目に入るかどうかは分からないが。

<加藤（丈）委員>

サムット委員の話にも繋がるが、基本方針Ⅱの多文化共生の関係、また、「戦略推進の考え方」で、外国籍市民がお客さまというように位置付けられているのじゃないか、というのがどうしても覗える。防災、教育ということが書かれているが、日本人の子どもにもっと国際的な視野を持った教育を、ということの良いのだが、当然、市民は外国人も含まれるので、外国籍市民の子ども、大人も、自分たちの考えを表明できる、市民権を得て自己実現を図っていくための環境整備という視点が弱いという印象を受ける。「戦略推進の考え方」というので、市民団体などと連携していこう、というのは分かるが、改めて考え方のところを見ると、結局、ターゲットを定めて札幌を売り込もう、ということや、札幌の地位を高めていこうというのは、基本方針ⅠとⅢにはつながっても、基本方針のⅡとつながる「戦略推進の考え方」が見えない。1つの視点としては、外国籍市民が札幌に残るように、ということもそうだし、より能力を発揮できるように、ということや意見を取り込むという視点もあると思うし、そのような視点が「戦略推進の考え方」にも表れると良いのではないかなと思う。

もう一点、「推進体制」というところとの関係で、多文化共生では国際プラザを中心にやろうということになっている。そのこと自体は良いが、それ以外にも窓口となるものはいくつもある。当然、市役所や区役所の窓口、教育の場面では学校、などいろいろある中で、全てを国際プラザに任せてしまうのはどうなのかなと思う。アクションプランとも繋がるが、施策推進の窓口となるのがどこなのか、ということをもう少し意識して「推進体制」というところを充実させると良いのではないかな。

<木村委員>

サマット委員からの話の追加になるが、海外ネットワークの活用と拡充というところについて、ここでは札幌と海外の、という対外的な内容になっていると思う。一方で、外国籍市民が間違いなく増えてくる中で、札幌の中のコミュニティネットワークも重要になってくると思う。既存のものとしては中国、タイ、今回委員にはいらっしゃらないが、韓国なら民団や総連というつながりもある。それ以外の札幌市民として生活している数が少ない国籍の方などは、ネットワークが希薄になると思うが、そういう市内のネットワークの拡充なども、市が積極的に関わって行かなくてはならない部分もあるのではないかなと思う。

もう一つ、ターゲット地域を明確にしたアジア、ヨーロッパとロシア・モンゴルの3点について書いていただいているが、国際戦略プランの基本方針Ⅲに出てくる「互恵的な」という視点で考えた時に、互いにとって **win-win** になるような方向性になっているのはロシア・モンゴルくらいなのかな、という感じがする。例えば東南アジア等については、各国の特色やニーズに合った事業展開を行うという、どちらかと言えば札幌が動くということ、また、ヨーロッパなどについては、施策を取り入れるなど、札幌が受け入れるという印象。ターゲット地域について考えると主にはこうなるだろうと思うが、基本方針にある「互恵的な」ということで行くのであれば、もう少し「お互い」という動きが伝わるような言い回しの方が良いのではないかなと思った。

<石井座長>

ありがとうございます。何点か意見が出たが、基本的には戦略推進の中で、外国人の市民がおられて、そういう方々を含めた連携、といったことが出ていた。以前の議論でも出ていたが、外国人も市民として位置付けられている社会をベースにして、そういう方もちゃんと普通に住めるというところから、連携関係を作って、ということを取上げて書く、ということが議論の内容だと思うが。

<佐藤委員>

推進体制については、加藤（丈）委員が言っていたことと同じ意見だが、札幌市と国際プラザのことしか書いていなかったが、もう少し他のルートも踏まえて書いてはどうか。国際プラザに集中して書いてあって、概要版では「そのうち、札幌市、国際プラザについては・・・」と書いてあるので、以前より良くなったとは思いますが、札幌市は当然のこと、国際プラザだけではなく他のルートについてもちょっと付言した方がいいと感じた。

<石井座長>

文章上は、逆の発想というか、一般的な環境を書いて、特に自分たちのこととして、市そのものと外郭団体について書いた、という構成上はそうになっているが。（それ以外の役割については）三行しかない。そこについてもう少しきめ細かく加筆していただく、というのがご意見だろうと思う。

<熊谷委員>

基本方針自体は、字数は足すことができないのか。

<事務局>

三つの基本方針について、バランスを取る、というのはあるが、限定しているわけではない。

<熊谷委員>

字数制限がないのであれば、もう少し詳しく書く、ということと、先ほどの話の続きとしては、人材に残ってもらうだけではなくて、世界の人材を取り込むというような、企業誘致みたいなニュアンスが入っていると良い。特に発信という言葉を入れていただきたい。ターゲット地域を明確にした、というところで、今後 10 年を考えると、これだけでいいのか、ということがある。これらを主としながらも、広く、レバレッジを取っておく、というようなことが必要ではないか。

<石井座長>

熊谷委員にご発言いただいたところについて、企業誘致というのは、戦略そのものの中で、一定の表現の盛り込みはあるのかな、と思う。「推進」という話では、誰が何をやるのかという話のところ。後段のターゲット地域というところについて、もう少し多様性も残るように、というのがご指摘だと思う。

<サムット委員>

ターゲット地域について、先ほど木村委員が言っていたこと（東南アジアについては売り込む、という視点であること）は少し時代が違うと思った。例えば、東南アジアについてどうみたらいいかというと、直行便があるかどうか、あるところにはいろいろな可能性が出てくる。タイでは、札幌のツールハも進出している。タイの企業も北海道の物を買ったり、情勢が変わっている。札幌も東南アジアに力を入れなければならない時代になったという一つの例。そのように、交通の便がいいところは、毎日のように一回 300 人、というような人数が行き来するというところ。ターゲット地域の中でも、直行便があるところは特に重要であると思う。

<石井座長>

概要版については、まとめ方の問題だと思うが、東・東南アジアについても、本文には国際協力的な交流ということも書いてあるが、この二行を見るとそれが完全に落ちているようにみえる。相互交流と見えるような表現を工夫していただいた方が良い。ヨーロッパ・アメリカについては、本文の中では環境ということも表題に来ているが、こっち（概要版）には書いていないので、全体の繋がりとしては、先ほども指摘があったように、言葉として出した方が良いのではないか。本文をもう少し忠実に表現してもらえると、意味が十分伝わるのではないかと思う。

<熊谷委員>

先ほどの話でいうと、ヨーロッパからこちらが学ばせていただく、というちょっと時代遅れなところだけが出てきてしまっている。

<石井座長>

基本的には相互的な協力、ということ言葉を盛り込んでいただくように工夫いただきたい。書いてあることは、決して片務的な内容ではない。表現ぶりの問題。

<張委員>

骨子案の書き方が分かりやすい。取り組み分野が先にきて、後から地域が来る。

<石井座長>

概要版のまとめ方だと思うが、これしか読まない人も多いと思うので、重要。

<張委員>

一つ、「連携の推進」のところに北海道も入れておいた方が良い。

<加藤（由）委員>

既存のネットワークの活用というところで、木村委員が言っていた外国人のネットワークの活用についてだが、これは、あまり顕在化して来ないところがある。それをどうするのか、ということは掴んでおかないと、アクションプランへの落とし込みはできない気がする。ネットワークに接触しよう、という時に、どこに連絡すればいいのか、どのようなネットワークがあるのか、など、どう連携していくのかというのが見えないと、難しいと思う。

<加藤（丈）委員>

逆に、そういうのを市で把握しておきなさい、という話になるかどうか、というところ。外国人の方はコミュニティ中心に情報共有して、いろいろな問題解決をされていて、コミュニティの果たす役割は大きいので、そこと行政がどう繋がっていくか、という視点は問題提起というレベルでもいいので、ぜひ入れておいていただきたい。

<石井座長>

次に、アクションプラン骨子案ということで、議論を進めたいと思う。はじめに事務局から説明をお願いします。

（資料2について、事務局から説明）

<石井座長>

それでは、ご説明いただいた内容について議論に入る。これはあまり分けずに議論していきたいと思うが、全体を通してご意見のある方は。

<木村委員>

議論に入る前に、一点だけ追加すべきと思うが、P17に国際平和や人権擁護の意識醸成、というのがあるが、そこで女性、障がい者などのマイノリティ、という表現がありながら、下の取り組みには障がい者についての記述がないので、具体的な取り組みとして加えていくべき。

<サムット委員>

いろいろまとめていただいているが、今回が最後の懇談会。ここで、何か新しいことを言ったかど

うか、という点で、例えば私は「外国人の顔が見える行政参加」のような形、今回このように会議に外国人も参加しているというのは、札幌市の考え方が少し変わったと思うところ。（政策を）作る段階から外国人も参加する、さまざまな人を活用していく、というのを札幌の新しいビジョン、基本方針として明記した方が良い。札幌は先進的な取り組みをしている、ということも示せる。一緒に札幌を良くしよう、ということ。

<加藤（丈）委員>

サマット委員から話があったように、市のいろいろな諮問委員会などに、外国人を入れる、というのを評価指標で5つ以上、とかそういうのがあったらいいかなあ、と思っていた。

（P13）施策の柱2の国際感覚豊かな人材の育成と活用、という中で、日本人の国際感覚を養うのに外国籍市民を活用する、というのを取り入れるのもあるのかな、と思った。

<熊谷委員>

委員会に、というのも一つあると思うし、人材育成もそうだと思う。それから、国際プラザが関係しているせいもあるかもしれないが、ボランティア、という言葉が多く出ている。MICEなどを考えるときには、やはり国際コミュニケーターとしての通訳者、プロフェッショナル集団や専門家ということも、どこかで言うのであれば。ボランティアだけでは、絶対にできないことがたくさんある。また、ホームページやWi-Fiが入っているのであれば、ソーシャルメディアをもっと目につくように入れていただいた方が良い。

<石井座長>

サマット委員がおっしゃったような視点は、私も重要な視点ではないかと思う。基本方針Ⅱの外国籍市民が暮らしやすいまち、というところに入れるとあまりインパクトがないので、少し違和感があるかもしれないが、産業の競争力強化で、国際都市に必要なインフラ整備、のような部分に思い切って書いた方がインパクトがあるような気がする。どこに書くか、にこだわりがあるわけではないが、せっかくそういうことを提言するなら、こういう出し方の方がいいかな、と思うので、検討いただきたい。

<佐藤委員>

最後、評価指標について、かなり細かく設定しているが、後で大変になるのではないかな。なので、例えば施策の項目が5～6あるが、それが達成されたかどうか、ということでもいいのではないかなと思う。

<加藤（丈）委員>

評価指標というのは、難しい。札幌の魅力向上とブランド化に対応するのが雪まつりだけでいいのか、とか、言いだすと切りがない。最も良く施策の進捗状況が分かる数値で、しかも把握しやすい数値でなければならないので難しい。まだ検討しているところとは思いますが、もう少しバリエーションに富んだものを検討いただきたい。

<木村委員>

札幌をアピールするにあたって、雪まつりだけを押し過ぎではないかと思う部分がある。先週韓国に行っていたが、向こうの JR、新幹線にあたる KTX の座席についているパンフレットに、札幌の広告が掲載されていて、写真がテレビ塔から大通公園を見下ろした雪まつりのものだった。札幌の人間からすると見飽きたものという感じもする。雪まつりはいいが、他のものも推していかないと、というのがある。評価指標で雪まつりを使うということは、そこに力を入れている、言い換えれば偏っているということでもあると思うので、数値だけが評価基準ではないと思うが、他のものも考えた方がいいかな、と思う。

あともう一点、P13 で異文化理解を深める交流の拡大、というところについて、ここで誰を持ってくるかということ、ALT や CIR、JICA 研修生を活用して、ということに加えて、留学生の活用、というのも入れていただきたい。北大の留学生などは、平日などは授業優先で忙しく、担当教官が OK しないということもあるが、日本に慣れていない学生であればあるほど、学生にとっても良い点がたくさんあり、互いにとって win-win になる。そういうことを大学にも分かってもらった方が良い。

<サムット委員>

私も、木村委員の意見に賛成する。私も北大にいた 7 年間は札幌の学校を 50 回以上訪問した。いろいろなところで交流して、少なくとも参加していた人たちはタイのことを知ってくれている。私がいつも考えているのは、札幌に来ている留学生たちも、日本と交流したいと思っているが、きっかけが見つからないという人も多い。例えば、札幌が国際都市になるために、「小学生が小学校を卒業するまでに少なくとも 1 回外国人と話したことがある」とか「手をつないだことがある」というような具体的な目標を設定して、達成するかどうか評価する、ということも考えられる。教育委員会や大学と協力して行う。北大では、留学生センターと学校が連携したりしているが、さらに拡大していくのが良い。手をつないだら、タイ人も、アフリカの人も、怖くないな、という感想になる。それで初めて、国際都市の市民が育っていく。それが大切だと思う。

<加藤（由）委員>

（留学生を）送る側から言うと、いろいろ問題がある。国際化推進、という意味では、どこの学校でも受け入れてくれるかな、と思われることが多いが、受け手にとっては、特に小学校や中学校などは忙しいので、校長先生は熱心でも、各担任の段階でなかなか良い答えが返ってこないということもある。外国籍の子どもたちの受け入れ、ということもあるが、教育のあり方というところまで踏み込んで行かないと、アクションプランで書いてもなかなか上手く行かないのではないかな。連携先を広げていく必要がある。先ほど、国際プラザに限定しすぎじゃないか、という指摘があったが、国際化のセクションだけではなく、全てのセクションが関わってくる、ということがもう少し必要ではないかと思う。

<熊谷委員>

話題は変わるが、先ほどソーシャルメディアという話をしたが、評価指標の中でもホームページのアクセス数というのがある。5 年、10 年経つまでもなく、例えばソーシャルメディアを使って海外拠点を職員などリアルなものだけでなく、バーチャルで置くとか、元市民を名誉市民や大使として任命

するということを入れた方がいいのではないか。評価指標でも、そのような市民が発信したツイートの数とか、そういうことも指標になると思う。そういうことで、もっとバーチャルを使っていく。実際に来た観光客の数だけではなく、バーチャルツアーやバーチャルホームステイなどウェブ上の参加者数というのも良いのではないか。

<張委員>

評価指標の中に留学生、というのが入っているが、外国人定住者、というか、学校を卒業をして働くなり、あるいは結婚していて、日本国籍までは取っていない方の人数というのは、札幌の魅力を評価する上で大事な要素ではないかと考えている。もちろん街が良くないとダメだし、産業が良くないと残ってくれないし、いろいろな意味で大事だと思うので、できれば外国人定住者なのか、登録者の中で留学生を除いた数字なのか、その辺を評価指標に入れると分かりやすい。留学生も大事だが、ある大学の政策によって、わっと増えたり減ったりするので、どちらかという定住者の方が、札幌の魅力を評価するには大事ではないかと思う。

<熊谷委員>

留学担当として、まさにそのとおりで、留学生は長くて4年、大学院に行っても6～8年で、国際ビジネス協会の話も出したが、ここでビジネスをしたり、ここが好きだからいる、一生ここにいる、という人たちとは異なる。先ほど、「ボランティア」という言葉が多い、ということを行ったが、「留学生」という言葉もちょっとそこだけが目立っていると思う。もっと定住、であるとか、配偶者としてような方にも着目した方がよい。

また、以前にもキャッチフレーズという話をしたが、札幌と言えばこれ、というものがやはり欲しい。最近耳にしたのは、“Incredible !ndia”というのが流れていて、頭文字を合わせているもの。この国、この街といえばこれ、というキャッチフレーズを公募して、それを積極的に使って、あの曲が流れたら札幌、札幌と言えばこのキャッチフレーズ、というのは、イメージの時代であり、大事だと思う。ぜひ入れていただければと思う。

<加藤（丈）委員>

多文化共生という視点から、教育はとても重要だと思う。重点施策として、日本語教育や外国人子女の学習支援ということも入れていただいているが、そこまでいくと踏み込み過ぎかもしれないが、外国籍の方の子ども自身の母語や文化、アイデンティティを配慮した上での教育、母語教育を受ける権利まで保障するというのは市の施策としては難しいところがあるのかもしれないが、母国のコミュニティの中で支援なりサポートを受ける機会を保障するという視点もあったらよい。

また、評価指標の中に市立大通高校で外国人生徒の受け入れ者数、なども指標として加えると、市の取り組みで、かつ教育で、という視点では数値として挙げていただいてもよいと思う。

<石井座長>

私も評価指標の扱いは、正直言って悩ましいと思っている。むしろ、単純に達成すべき目標を数値で置いてそれで進捗管理をしていく、というのは時期尚早というか、乱暴すぎるのではないかなというのがある。評価指標を何に落とせるかを試す、トライアルというのを全く置かないで評価指標を

決めちゃう、というのは、内容が薄すぎるというと失礼になるが、フィットしていないものがありすぎる、というのが一つ。逆に、少し位置づけを緩くしておいて、入れるとしたら、指標は一個に絞らないほうがいいんじゃないか。類似のものでも構わないし、できれば類似のものではない方が良いが、複数置いて、どう評価できるか、ということも見ながら、進捗管理する、という少し試行的な要素を入れてみたらどうか、というのが率直なところ。これでいきます、というのは少し乱暴すぎるのではないか。特にⅢの「持続可能な社会に向けた環境整備」のところは、大分困ったのではないかなと思うが、例えば海外からの研修受け入れ人数というのがあるが、大局的に言えば、こちらから何人出したか、ということとペアにしないと殆ど意味がないし、札幌から海外に派遣した人数、とか。両方ないと双方向にならないので、指標としての価値も無くなるし、言っていることがブレることになる。市役所の中でこの指標が出ることで、アクションにつながるようなことをあえて入れたらどうか、と思う。懇談会で入れさせられたということで。海外で協力に出ている人については、実態としてはこれまで削ってきている。財政的な問題から。そういうことをしていかなければ話にならない、という方へ軸を戻さなければいけない。当然、受け入れやすい、単に JICA とかで来ている人の数だけじゃなくて、自分たちでやった、ということ絶対入れてほしいと思う。双方向にしていないとつまらない。残り二つについても、さすがに「子ども環境コンテスト応募団体数」というのは、余りにも、という感じがするので、ある種の都市づくりという話なので、もっと違う行動ベースのことを盛り込むとか、会議の参加都市などではなく、施策研究と言っているのだから、何本やったかとか、市がやることを少しノルマになるような指標を敢えて入れることの方が、実行性があると思う。いずれにしても、試行だというイメージを出して、かつ、市がやっていく部分、というのも入れろという議論が大勢を占めて、入れざるを得ない、ということになると思う。入れることで市役所のアクションが変わることになるような、そういうことを入れ込んだ方が、作る意味があると思うので、考えてみてほしい。

<熊谷委員>

今のポイントには大賛成。項目を多くした方が良いと思う。

<石井座長>

一個だけだと無理やりに見えるものも、3つ、4つと並べておいて、何かを表せる、ということにした方がいい。もともとあまり指標がないということは承知しているが、これだけではないはず。できるだけ拾い集めていただければ。

<熊谷委員>

札幌市が取り組むものだけが対象となるのか。そうでないのであれば、北大などで行われる国際会議なんかは、本当にがら空き。市民開放のときに、市民が殺到するようであればいけないわけで、いくつかある指標にそういうものも入れてはどうか。

<加藤（丈）委員>

こういうものは、難しい。達成できない目標を立ててしまっただけで、結局「達成できなかったじゃないか」という批判を受けることも心配されるだろう。あと、国際プラザが中心になって多文化共生を推進する、ということだったが、それでは国際プラザの事業はこの中にあるかということ、見当たらない、

とか、例えばコールセンターを活用するというのであれば、外国語を使った情報提供の数、とか、まだいろいろあると思うが、検討いただければと思う。

<熊谷委員>

プラザというのが出たが、プラザの機能を各区民センターなどに置く、ということはどうなのか。職員が足りないというのもあるとは思うが。留学生にプラザに行きなさい、と言っても、大きな市の中で、なかなか出て来れないということもある。常設ではなくても、市民の参加や関心を促進するためにも、サテライト機能を置いていくということも考えられる。

<加藤（由）委員>

各区民センターで留学生との交流ということもトライアルで行っている。

<熊谷委員>

これまでもイベントはあるかもしれないが、システムとして、対応していくことが必要ではないか。こういうところでこそ、ボランティアを活用することもできるのでは。ボランティアに登録したけれども、なかなか出番がないと言っている人もいる。

<石井座長>

せっかくなので、国際プラザの役割も、新たなものを出して、それをプランに盛り込んだ、というようにした方が、いろんな機能を統括して推進するということにもなると思うので、今ちょうどいい例を出していただいたが、従来やっていることの延長上と見えない、具体的な何かを、特にアクションプランには、盛り込んだ方がいいと思う。役割を市だけでなく、国際プラザの役割もバージョンアップするという意味はあるのではないかと思う。そこは市内外に訴えた方が良い。

<サムット委員>

評価指標の数字についてだが、（東南アジアからの外国人宿泊者数は）52,314人とか、留学生とかいろいろあるが、多いのか、少ないのかということが分かりづらい。最初の時も言ったが、札幌には0.5%の外国人登録者がいるが、それを2%に上げるとか、大きく書いて見る方が良い。達成できなければ、なぜ達成できないのか、ということを踏まえてその後より積極的に打ち出せばいい。

<石井座長>

先ほどの話につなげて言うと、札幌市の外郭団体に対する評価というか、見直しは随時行われていて、厳しいので、評価指標にプラザが担う数字を思い切って入れてはどうか。

<佐藤委員>

重点施策が4項目置かれているが、施策の柱は6本ある。それぞれに対応させて6項目にするということは大変ということか。

<事務局>

特に力を入れるもの、ということでたまたま４項目になっている。

<佐藤委員>

施策の柱にそれぞれ重点がないのはやや力が入っていないのかな、という印象がある。

<石井座長>

逆に評価指標は、全部に入っていないけれども良いという考え方もあると思う。関連づけられるところからスタートして、残りを定性的に、ちゃんとフォローアップする、という。数値はいろいろやって失敗しているところも多いので、一般的な評価でも良いかもしれない。返って踏み込み過ぎると数値を出す意味が薄れる可能性もあるので、慎重にした方が良い。そして、入れた数字についてはしっかり目標管理していく。全くコントロールできない数字を入れると、結局、何をやってもその数値は関係ない、という話になると、意味がない。政策を打てなくなる。そこは陥りがちな失敗の例なので、考えていただきたい。

それでは、時間も迫ってきたので、議事の３意見について、入るが、まず加藤（丈）委員から説明をお願いします。

<加藤（丈）委員>

資料３-１で意見書として、私の名前のもになっているが、私が共同代表を務めている「多文化共生ネット」という市民団体があり、これは札幌市内のいろいろな NGO や市民団体で中心的な活動を行っている人たち、メンバーとして決まりがあるわけではないが、大体７、８名程度で議論をしており、これまで札幌市国際部と２回に亘って意見交換などをしてきた。そのような経緯もあり、この懇談会で議論している内容についてぜひ意見をまとめたいと思い、持ち帰って議論をしてその結果を私が意見書という形でまとめた。

内容については事務局から後ほど説明があると思うが、私から申し上げたいことは今日すでに口頭で申し上げた内容と重複するが、特に多文化共生という視点から、前回の懇談会の資料を基にしているので今回とは噛み合わない部分もあるが、意見を集約した上で、文章にさせていただいた。意見書という形にすると偉そうに聞こえて、気になられた方もいるかもしれないが、決してそういう趣旨ではなく、意見を集約してまとめたものということ。

（資料３-２について事務局から説明）

<加藤（丈）委員>

今回の改正後のアクションプランの内容については、今日は全て口頭で申し上げた。

<石井座長>

これまでも、同様の論点からの意見は出ていたので、うまく反映していただければと思う。よろしくをお願いしたい。全体について何かあればどうぞ。

<佐藤委員>

最後に、資料を読んでいて言葉の問題だが、数字で人口のところが単位が異なっているところがあったので、修正いただきたい。もうひとつ、概略のところで、「国際戦略」とだけして「プラン」という言葉がついていないところがある。一般的な「国際戦略」との区別をつけた方が良い。

<熊谷委員>

（加藤委員から提出があった）意見書の関係で、相談窓口か、学習支援になるのか分からないが、うちに来ている学生が毎年冬季うつになる。積雪寒冷というのは売りでもあるが、寒さ対策という面でも、留学生に対しては各大学が対策をしているとは思いますが、家族などに対して異文化適応の学習機会を提供したり、冬季うつなどに対するカウンセリングなど、きめ細かくやっていることが分かるようなことをどこかに入れた方が良いのではないと思う。

<木村委員>

具体的な施策としてもう一つ追加を検討いただきたいことだが、P8 のところのインバウンドの誘致に関連してくるところだが、海外からの旅行者に対して、直接のヒアリングをすることによる評価ということもできるのではないか。ホテルなどに、直行のハガキを置くなどして、不便な点や気がついた点を直接フィードバックしてもらおう。そういうことを検討いただきたい。

<石井座長>

いろいろ意見が出たが、ぜひうまく形で活かしていただければと思う。この懇談会は最終回ということだが、最後に事務局からお願いします。

<事務局>

この懇談会については、当初予定していたよりもかなり長い期間の開催になったが、お付き合いいただきありがとうございました。

今後は上位計画である戦略ビジョンについて、庁内での議論が進められていくので、それに合わせてさらに国際戦略プランの内容調整を進めた上で、パブリックコメントを行う。いずれにしても、国際戦略プランについては、来年度の早い時期に公表できればと考えているので、その時期になったら改めてご報告したい。お忙しい中、ありがとうございました。